

つばさ静岡

主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張ってのぼる。
 (イザヤ書40:31)
 神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばってください。
 (詩篇91:4)

社会福祉法人 小羊学園
 〒433-8105 静岡県浜松市北区三方原町2709-12
 発行人：稲松義人

つばさ静岡
 〒420-0805 静岡市葵区城北117
 電話：054-249-2830 FAX:054-249-2831
 e-mail:tubasa-szok@wind.tnc.ne.jp
 H.P http://www.tsubasa-szok.net/
 印刷所：明和印刷株式会社

号 外 2023年11月1日

つばさ静岡の年間目標は昨年度に引き続き、今年度も「美意識を磨く」です。最近、皆さんは美しいものに出会っていますか？

美しいものと言われるとまず思いつくのは、満開の花々や秋の紅葉、澄みきった星空、人によっては推しのタレントの写真やアニメのキャラクターということもあるでしょう。こういうものを見ると、ひとときの癒しをもらえます。美しいものには癒しの力があるのです。

美しいものとは見るものだけではなく、香りや楽しい音楽、泣ける小説や感動した映画、充実した体験、出会い、他にも食後の満腹感であったり、お店でのちょっとしたお得感、そして人の笑顔や親切、日々の挨拶や感謝の言葉など、至るところに美しいものはあふれています。要はそれに気が付くかどうかです。

昨今、AI(人工知能)が急激に進歩しています。ChatGPTというものを使うと、コンピューターが質問に答えてくれるだけでなく、頼めば人に代わって文章を作成してくれます。初期のものは間違いも多かったようですが、最近では日々改良が進み(学習して)、無数と言ってもいいくらいの情報源と繋がることにより、非常に質の高いものになっ

美しいもの
 施設長 山倉 慎一

ているそうです。ちょっとした(大学生レベル)論文なら、ものの数十秒で作りに上げてしまうようです。さらに今のAIは、文章だけではなく、音楽でも絵画でも写真でも簡単に作り上げてしまいます。すごい時代になったものです。

しかし、AIに美しさがわかるとは思えません。なぜなら人の心を持たないからです。人の喜びや幸福感、悲しみや心の傷みを彼らを感じる事ができるのでしょうか。春、桜が一斉に咲いた時の高揚感や散りゆくときの儂さ、夏の夕暮れ時にヒグラシの鳴き声を聞いて感じるそこはかとない寂しさ、秋の虫の声を聞きながら季節の移り変わりを感じたり、冬の厳しい寒さに気持ちが凍えたり、そういう感情がなければ、そして命を慈しむことができれば、人の心などわかるわけがないのです。数百の詩を簡単に書けたとしても、数百の曲を瞬時に作れたとしても、その中のどれが美しいのか、どれが人の胸を打つかは決してわからないでしょう。

近い将来、多くの職業がAIにとって代わられるとも言われています。医師の行う診断や治療などは彼らの得意とするところであり、いずれ彼らの知識や技術の方が上回るでしょう。すでにレントゲン写真の画像診断の技術などはAIの方が人間の能力を凌駕していると言われています。しかし、最後まで彼らには決してできないであろう仕事があります。看護や介護の仕事です。入浴介助やトイレ介助、移動や移乗の介助などは彼らが機械的にできるようになる可能性はあるでしょう。ただ、「そこに、愛はある



るか？」という話になります。心を持たないAIやロボットには人の心地よさ、人への思いやりや感謝の気持ち、そういった心の機微は伝わらないでしょう。そうなる、もはやそれは看護、介護ではなく単なる作業でしかありません。

相田みつをさんの詩に「あなたのこころが美しいから…」というのがあります。美しい心があるから、美しいと感じることができると教えてくれます。美しい心がなければ、美しいと感じることができず、ましてや美しい仕事はできないでしょう。看護や介護という仕事は職員一人一人の美しい心に支えられているのです。「美意識を磨く」とは、たくさん美しいものを見る、体験する、感じるということだと思います。AIにはわからないでしょうね。

**利用者さんとの
 関わりのなかで**
 上原 仁美

わたぐもでは、この夏活動の一環で野菜作りに取り組みました。ミニトマトやシントウ、ゴーヤ、スイカなどを育てており、既実ったものもあり、日々お世話に勤めています。

私は恥ずかしながら園芸には疎く、植物を育てたことはほとんどないので、野菜の育つ姿には驚かされるばかりです。小さな苗から少しずつ成長し、花が咲く様子を見るのはとても楽しく、植物の持つ逞しさと力強さを間近で感じられてこちらが元気をもらえます。

利用者さん達ももちろんお世話をしてくれました。プランターへ土を入れるところから一緒にいい、植え付け等利用者さんも取り組みやすいように工夫して作業を進めました。また、春から初夏にかけては外でも過ごしやすく、野菜への水やりも利用者さんと共に積極的にを行いました。

その中で新たな発見があったのが、利用者さんの表情や思いの表出です。外に出る活動として定番は散歩で、外の空気を感しながら歩みを進めると利用者さんの表情も和らぎ、室内とは異なる様子を楽しんだり、リラックした表情が見られたりとそれぞれに楽しむ様子が見られることは感じて



いました。園芸は主にテラスでの活動でしたが、野菜を前にするとほとんどの利用者さんが普段よりも明るい表情が見られたように感じます。水やりをお願いすると腕を動かして関心を示してくれる方や、外に出た際野菜に視線を向ける方、収穫の時には野菜に視線を通し、利用者さん達それぞれの細やかな表出に改めて気付くことができました。

利用者の皆さんはほんの少しの変化を敏感に感じ取り、私達に表現してくれています。美意識について考えた時、私は利用者さんのようにささやかな違いを感じ取る事ができれば、自分の感性も少しずつ豊かになっていくのではないかと思います。外に出た時の日差しや風の変化だったり、何かに触れた時の感触を気に掛けたりというのは、普段の生活の中では瞬で意識にのぼらない事がほとんどですが、ひと呼吸おいて季節の移ろいや日々の変化を感じていけたらと思います。

美しい風景 at 静岡
 西村 和也

昔から「山」なんて好きではなかったはずだが、ここ数年来ハイキング(低山)がマイブームになっている。浜松勤務時代には仕事(日中活動として)で利用者や遠州の山々を登っていたことはあるが、好きで登っていた訳ではなく、仕方なく…と言った方が正しい。小羊学園のレジデント職員であるF上さんと勤務が一緒の時は1日、利用者と一緒に山の中をどれ程歩いたことか…(今となつてはいい体験をさせてもらったと感じている)。

数年前に静岡に転勤になってから「山」とはしばらく無縁の生活を送っていたが、思い返せば別の趣味である城巡りをきっかけに体力の低下を痛感して近くの低山を登り始めたのがスタートだった。何しろ静岡はちやうと山に登れば富士山が素晴らしく綺麗に見える。最初は休みの度に体力作りと称して近所の2〜300mの同じ山を繰り返し登っていた。頂上から少し縦走すれば隣山まで行け、季節によって富士山が良く見えたり見えなかったり、清水港やその向こうに伊豆半島が霞んで見えたりとしばらくはその景色を眺め満足していた。

しかし、毎回同じルートを登っていると段々飽きてきてしまい、そのうち違う



ルートで頂上を目指す、又は下山ルートを変更したりして楽しむ様になった。次にネットで近くの他の山の情報を検索しているうちに登山アプリのYAMAPなるものがあることを知り、そこから現在の「登山」にハマってしまう。YAMAPの良いところは他の人が登った山のルートや情報を写真やコメント付きで日々UPしてあり、見ているだけでとても楽しめるのが良いところ。尚且つ最新の山の状況も確認でき、優れたアプリとなっている。今では好きな時間に次の機会に行けそうな山を探すのがまた別の楽しみとなっている。現時点では安全面や自分の技量的に低山メインとなっており、1000〜2000m級の山にはあまり行ったことはないが、いつかはチャレンジし、県外の有名な山に行ってみたいと思っている。その日、その時しか見られない美しい景色に出会えることを楽しみに…。

機能美こそ、究極の美

奥原 雄太

このタイトルは、8/2に行われたトヨタ自動車の新型ランドクルーザーのワールドプレミアで開発のポイントの一つとして挙げられたものです。世界にはランドクルーザーにしか走る事の出来ない道があり、そんな車を開発する際に掲げられたのが、この「機能美こそ、究極の美」。美しさは機能性からこそ生み出されるという言葉です。

今年度、私は環境係に配属され、昨年度から検討されていた各利用者の軟膏類を保管しておく棚の整理をすることになりました。この棚には、利用者の軟膏類だけでなく、S/M/Lの3種類のゴム手袋、爪切り、綿棒、SS利用者用の歯ブラシと様々なものが入っていました。軟膏類に関しては、一つのトレイを仕切りで区切って複数人で使用している状況で、大きい軟膏チューブは収まりきらず、仕切りも簡単に外れ他の人のものと混ざってしまうことも頻繁にありました。

この状態のせいで、少なくなってきた軟膏の追加処方依頼時や、普段の軟膏処置時にあるべきところに入っていないために探さなければならず、余分な手間が増え、業務効率が悪くなっていました。その上、処方される軟膏の本数も利用者によって異なり、軟膏の大きさも種類によって異なる為、棚の中がごちゃごちゃし、見た目にも悪く、機能的にもとても使いにくいものでした。

そこで、それらがしつかり収まり、見た目もすっきりとなるものを探し出し、設置しました。そうしたことで足りないものが容易に把握でき、必要なものはすぐに取り出せるという状態になり、見た目にもスマートで美しく、機能美と言えるものになりました。

世界的な名車であるランドクルーザーを開発するチームが掲げたポイントである、「機能美」というものを追求することは、業務の効率化につながり、業務改善が進み、それは職員の肉体的・精神的負担の軽減につながり、最終的に利用者へ還元されていくことになると思います。

今後業務が効率的に回るような機能美を目指した環境整備を行っていきたい。



氷アートの世界

増井 留美子

猛暑が続く8月の日曜日、涼しげな素材を使い、夏らしい活動を行いました。色つきの氷を使い、遊びながら描く「氷アート」です。

色つきの氷は製氷皿やプリンカップに

絵の具を溶かした水を入れて作ります。ラップをかけて、割りばしをさし、冷凍庫で凍らせて出来上がり。色とりどりの氷が並ぶととてもきれいで美しいです。その氷を使い、観たり、聴いたり、触ったりしてみました。

いろいろな色の氷をカップに入れて「綺麗だね」と眺めたり、氷をカップに入れてカラカラ鳴る音をきいたり、手に触れて「冷たい」と感触を味わったり、最初はべたべたしていた氷も、触っているうちに溶けて小さくなり、つるつるなめらかな感触に変わってきました。

感触を十分味わった後、キラキラ光る色とりどりの氷を使って模様を思い思いに描きました。白い画用紙の上で、ギョーツと押し付けたり、スタンプのようにポンポンと押し付けたり、シユーツと線を描いたり、色水が溶けるのを待って垂らしたり。

冷たい言いながら、職員も利用者さんも皆に笑顔があふれていました。

出来上がったものを見ると、自然にできた模様がカプトムシや花火、ひまわりなど色々なものに見えてきました。

美術作品は、具体的な物の絵をそのまま描くものが多いですが、職員、利用者さん1人1人の感性で楽しさが現れ、きれいな氷アートになり、美しさを感じられた活動の一つでした。



皆の感性でできあがった氷アートを集め並べてゾーンの壁に飾りました。美しい作品になり、8月のゾーンを彩っています。

下さった時はとても驚きました。畑のお隣さんへも気軽に育て方を教えてくれ、知らない間に耕運機で畑を耕してくれたりします。畑では職業や年齢、肩書きも関係なく、緩く繋がっているのですが、温かく利他的なコミュニティだと感じます。また、緑濃い高草山を背に、地面に座りおにぎりやおやつを食べながら、家族やお隣さんへ雑談をするのは、とてもゆつたりした時間となります。土を触りながら過ごす時間は、心の問題を抱えた家族にとっても安らぎの時となっているようです。

最近読んだ本で、アメリカの社会学者が提唱したサードプレイス(第3の場所)という言葉を知りました。条件としては、家庭や職場ではない場所、自発的に向かい、ありのままの自分で過ごせる居心地の良い場所、とあります。正に山の麓の畑が、私にとつてのサードプレイスであると感じました。農園では、隣の畑と比べて育ち具合が悪くても気になりませんし、それを指摘する人もありません。野菜作りは、予定調和は無く、自然に任せながら歩調を合わせ

私のサイドプレイス

平井 光代



少し視線を巡らせ、ちよつとした発見やそれに感動できる自分に気付いた。小さな緑の葉に大きな感動をもらった夏の出来事だ。

私は、高草山の麓にある農園で野菜作りを楽しんでいます。些細な理由で始めたのですが、大きな学びがあると感じています。自ら耕した畑に植えた苗が成長し収穫できた時、喜びを周囲と分かち合うことができます。畑を借りたその日に大家さんが、苗や農機具の準備から植栽までを軽やかにやっ

緑の葉っぱ

久島 秀美

美意識や美についてお題をいただいたが、なかなか思い浮かばない。「きれい」と変換しても思い当たらず、縁がなかった言葉である。そもそも美的感覚など人それぞれで、皆が共感してくれるものを表現できるかどうか。

なので最近になって「葉っぱの緑!きれい。小さいけれど生命力がすごい」と思い至ったことについて書いてみる。

数か月前の事であった。つくしBのリビングにサツマイモの切れ端が、カップに水を張り漬けてあった。いつしか芽が出て、葉を伸ばしていった。

ここ最近の猛暑は知つての通り。クーラーで室内の温度を調整しても動いていると向に涼しく感じない。我が家でも仏壇の花がすぐに暑さにやられてしまい、水が腐ってしまうので供えるのは盆暮れ、初夏の期間限定になっているくらいだ。

このサツマイモの水替えは当番制ではなく、皆がそれぞれに面倒をみていた。元気に水を吸い上げ、葉を伸ばしていくのが微笑ましかった。私自身も童心に戻つて成長の様子を観察する、小学生の自由研究が観察日記のような気分を味わった。

そんなある日「よく育たねえ、庭の方に植え替えてみようか」という話になった。早速茂つた葉を3分割し耕した庭へ植え替えた。土に返つてどんなふうになるのか楽しみであったし、大きくなると

からの社会で大切になってくるのではないだろうか。サイドプレイスは、生きる力となる上質な感性を養う場所になり得るのではと感じています。



すぐそこにある美しさ

谷口 正己

梅雨の真つただ中のある日、6月中旬頃のことでした。その日はつばき静岡の宿直当番でしたが、夕方頃ふと宿直室の窓から外の景色を眺めてみるとあまりの美しさに心を奪われてしまいました。夕焼けで空は二面オレンジ色に染まり、施設付近の水田は赤く染まっていたのです。また空の上の方は間もなく訪れる夜空との境目で、薄い紫色のグラデーションのようになっていました。私はその景色に目を奪われながら、ここは本当に私たちが普段暮らしながら仕事をしている場所なのかと目を凝らしてしまふほどでした。

日本中の観光名所や海外には美しい場所が数えきれないほどあり、テレビや雑誌でそういった景色を見ると「こんな素敵な場所に行か行ってみたい。」と感じますが、普段私たちが生活している日常のすぐそばにもそれらに匹敵すると言つても過言ではない景色が広がっていることに気づかされました。



三年前から私たちの生活は、変し、あらゆる行動が制限され施設で行われる行事等も中止や規模の縮小を余儀なくされてきました。利用者さんおよび私たち職員も楽しさや感動を覚える機会が減つていつてしまったかもしれません。5月8日から新型コロナウイルスの位置づけも5類に引き下げられ世間は以前の日常を徐々に取り戻し始めていますが、私たちのように医療機関で勤務する人たちにとってはまだまだ予断を許さない状況です。今でも施設内で感染者の方が出たままにしているのが現状です。それに加え日々の忙しさから私も少々疲れ気味でしたが、その梅雨のある日の美しい夕焼けは私の美意識を高め元気づけてくれたような気がしました。

今、私たちには新型コロナだけでなく様々な問題が立ち塞がっています。日々の生活に疲れてしまう方もいるかもしれません。しかし私があの日見た夕焼けのように少し窓の外の景色を眺めてみると、そこには普段と違った美しい世界が広がっているかもしれませんが、これを読んで下さっている方も日常の景色を少し違った角度からご覧になつて、美意識を高めてみてはいかがでしょうか。